

# しがだい

== 滋賀大学広報誌 ==  
第16号 平成15年7月

## 特集 滋賀大とびわ湖

誌上シンポジウム  
—びわ湖を探り,想う—  
びわ湖をめぐる研究と教育  
私にとってのびわ湖

連載  
今の研究を語る  
滋賀大学の新しい動き

## 誌上シンポジウム

# 「びわ湖を探り、想う」

特集「滋賀大とびわ湖」として、まず4人の先生方にびわ湖との出会いや、びわ湖に関する研究などを紹介してもらうことにしました。また、びわ湖への熱き思いも語っていただきました。

梅澤 直樹（経済学部教授） 北村 裕明（経済学部教授）

服部 昭尚（教育学部助教授） 堀越 昌子（教育学部教授）

司会：遠藤 修一（広報委員、教育学部教授）

### びわ湖との出会い

**司会** 今回は、琵琶湖とのつながりが深いと思われる先生方をお願いして、誌上シンポジウムという形で琵琶湖との出会いや関わり、琵琶湖研究、琵琶湖への思いなどについて大いに語っていただきます。それではさっそくですが、まず先生方と琵琶湖との出会いや関わりなどについてお話ししていただいけませんか。

**堀越** 私と琵琶湖との出会いはまず食べ物からでした。長浜市の生まれで、小さい時からお米と琵琶湖の湖魚を食べて大きくなりました。家は農家で、湖岸から五キロメートルほど離れたところですが、行商の人が自転車でトロ箱に湖魚を入れて売りにきてくれました。それを祖母、母が料理してくれました。アユの山椒煮、イサザ豆（写真）、エビの大根煮、シミ煮、フナズシ、フナのあら汁、ハス魚田などが、私にとって故郷の味です。今でも時々、母からアユの佃煮が届きます。お祭りにも琵琶湖の幸がたくさん並びました。

このように琵琶湖は小さい時から、魚をつかみ、泳ぎ、水とたわむれる場所でしたし、生きていくための水、食料を供給してくれる恵みの湖でした。琵琶湖を単なる背景として



イサザ豆

ではなく、身体と味で覚えていった感じですが。私は京都で学部・大学院時代を送りましたので、夏には必ず琵琶湖で泳いだものでした。琵琶湖との出会いとして、思い出しに強く残っていることが二つあります。

一つは、二十二年前に滋賀大学に助手として赴任してすぐに、研究棟六階の教官ロビーから眺めた琵琶湖の夕焼けの美しさです。空だけでなく湖面一面オレンジ色に染まった景色は壮観でした。こうした恵まれた自然環境のもとで、大学教師としての第一歩を歩めることを心からうれしく思ったものでした。

二つ目は、十年ほど前に家族と親戚とが集まって、近江今津の丁字屋という旅館で過ごした夏の日です。旅館のすぐ裏から琵琶湖の湖岸に出て子どもを泳がせ、今津の花火を見、旅館の親爺さんからいろんな話を伺いました。琵琶湖とともに生きるという生活を肌で感じたことが印象に残っています。

### 服部

私は院生時代（大阪市大生）、琉球大学の熱帯生物圏研究センターというところで、毎日、サンゴ礁の海に潜って魚の生態を観察していたのですが、大学院を出ると経済的に沖縄に行けなくなってしまう、大阪に近いところで潜水調査に良い場所はないものかと、地図を眺めてひらめいたのが、琵琶湖でした。ずっと海に親しんできましたが、実は湖のことはあまり知りませんでした。その後、琵琶湖周辺の研究者に琵琶湖のことを教えていただき、世界有数の古代湖としての魅力を知り、これは良いフィールドだと確信しました。琵琶湖博物館の中井克樹さんに、一年を

通してほとんど荒れず、透明度も良い奥出湾（北湖）を案内していただき、九四年の三月にはじめて琵琶湖に潜りました。水深五〜六メートルまでの湖底はびっしりと外来種のコカナダモで覆われ、魚影は少なく、水草帯の中に漁船が沈んでいたことが印象に残っています。海と比べてしまつたためか、水位が季節的に変化することや、水草が一年中繁茂すること（海藻は夏以降に姿を消します）、外来種が繁殖していること（サンゴ礁に外来種はいません）に興味があります。



服部助教授

**梅澤** 私は京都市南部の伏見区というところに生まれ、二十五歳までをそこで過ごしました。ですから、直接に琵琶湖を目にしながら育つたというわけではないのですが、琵琶湖はもともかなり身近な存在でした。たとえば、子どもの頃から水道水として琵琶湖の水を飲んできたわけですし、海から隔たっていた私たちにとって近江舞子など湖西の各地は水泳場としてポピュラーでした。ですからまた、琵琶湖が日本一大きく、かつ透明度の高いきれいな湖であると学校で教えられれば、誇りにも思いました。さらに、高校生の頃には一泊かけて自転車で琵琶湖を一周してきた同級生はちよつとした冒険者として仲間からまぶしくみられたものでしたし、琵琶湖周航歌には学生時代が切り離しがたく結びついていま

す。その後七年ほど琵琶湖からは少し離れて和歌山で暮らしたあとで、今度は琵琶湖をすぐそばに眺めることのできる研究室で過ごすようになりまし。そのように過ごして早や二十一年経ちます。けれども、赴任した直後の初夏に研究室の窓から眺めた、琵琶湖に落ちる夕日の美しさは今も忘れがたいものがあります。そればかりではなく、資本制市場経済システムの考察を続けてゆくなかで経済システムとそれを取り巻く諸要因との関わりに関心を深め、環境問題にもフィールドを広げてきた私にとって、琵琶湖と関わつての人々の暮らしは研究上も重要な関心事のひとつとなつてきているのです。

## びわ湖を探る

**司会** ありがとうございます。琵琶湖との出会いもさまざまですね。それでは、次に、先生方の琵琶湖に関連する研究教育などについてお話しいただけますか。

**堀越** 湖や川に棲む淡水魚を利用する文化は、稲作と結びつき、アジアで生まれ、ナレズシという発酵文化も生み出してきました。琵琶湖があつて魚が棲み、琵琶湖があつて稲が実ります。滋賀は、琵琶湖のおかげで、アジアに典型的な「米と魚」の文化が発展してきました。

琵琶湖の水質は長くきれいに保たれてきましたので、琵琶湖の魚は、川魚特有の臭みが少なく抜群に味がよいのです。それだけに淡水魚の利用法が高度に発展してきたといえま

す。琵琶湖周辺は、その米と魚の融合した文化がみごとに花開いた場所です。神様に供える神饌にもフナズシ、ハスズシ、ウグイスシ、ドジョウズシなど湖魚のナレズシが登場します。滋賀県は海に接していないので、琵琶湖や川から獲つた淡水魚がふだんから食卓に上りました。その食生活上の重要性はとも高く、神様に供える神饌に湖魚のナレズシが登場するのも当然といえます。

## 北村

もう十三年ほど前のことになりましたが、本

学の尾上久雄元学長を研究代表とした研究グループで琵琶湖の環境的価値を推計する作業に関わつたことがあります。私はその際事務局の作業を担当しましたが、擬制市場法を用いて、琵琶湖の飲料水源、水泳場、釣り場としての価値を推計してみました。擬制市場法は、今日では環境的価値を推計する方法としてよく使われるようになりましたが、当時の日本では最初の本格的調査といえるものでした。飲料水源としての琵琶湖の水質改善にとまなう総便益は、十兆円と推計されるという結論を得ました。琵琶湖総合開発に投じられた総事業費は一兆六千億円で、うち水質



北村教授

保全事業は四、一―五億円にすぎません。琵琶湖の環境保全事業を、さらに大胆に進める価値があることを研究結果は示しています。

服部

外来魚の生態と、その生息地としての水草帯を研究しています。初夏に海津大崎で潜った時、偶然、水深一メートル位の浅場で、ハス（コイ科の大型の魚食魚）の産卵に出くわしました。体長三十センチメートル以上もある雄たちが、オイカワみたいに、きれいな婚姻色に染まり、雌をめぐってビュンビュンと激しく争う様子は、圧巻でした。この日、五十年前前の琵琶湖に潜ったら、ブラックバスやブルーギルなどではなく、何千年も何万年も前から住みついている在来種の様々な営みが観察でき、どんなに面白かっただろうかと、残念な気持ちになりました。琵琶湖の汚れたイメージもあり、「琵琶湖で潜るんですか？」と言う人は多いです。また、バス釣り愛好家のように「釣った魚はあえて食べない」と胸を張るのも不自然な気がします。海のように、「磯遊び」や「素潜り」、「釣った魚をおいしく食べる」など、琵琶湖の生物との自然な触れ合いを楽しむ人が増えたらいいなと思っています。琵琶湖には水鳥もたくさん来ますし、バードウォッチングもお勧めです。魚や水草を食べる側の立場になるカモ類なども対象として、その生態も水位変動などに関連させて研究しています。

梅澤

近年では研究対象として琵琶湖と接するようになりました。人々が自然に対してどのような姿勢、感覚を抱きながら生活を営み、そのことが環境問題にどう関わっているかが私

の関心事です。したがって、琵琶湖に関してであれば、水に関わる日常的な文化ないし思想が気にかかります。幸い、私の演習の卒業生のなかに琵琶湖総合開発をめぐる裁判に深く関わった人がいて、彼が贈ってくれた文献を手掛かりに水の思想という観点から琵琶湖総合開発問題を検証してみようというのがさしあたりの課題です。さらに、日常的な文化ないし思想の観点からは、農業の変貌と琵琶湖の汚染との関わりも注目されます。近年少し関わらせて頂いている琵琶湖研究所のスタッフの方々とともに交流しながら、研究を深めていけたらと願っています。



梅澤教授

びわ湖を想う

司会 ありがとうございます。いま、琵琶湖は水質の悪化や集水域の変化などさまざまな環境問題に直面していますが、琵琶湖への思いや、琵琶湖の将来について語っていただけますか。

堀越

食文化調査では各地をまわりますが、滋賀県はどこへ行っても琵琶湖と関わりがあります。農村部や山村部でも琵琶湖から川をさかのぼってきた湖魚の文化がありましたし、とりわけ湖岸部は、魚貝が食卓の主役で、湖水が飲み水や生活用水になり、水田の灌漑水と

なりました。生活の場そのものが琵琶湖と深く関わってきました。滋賀の人々はいつも琵琶湖を意識して生きてきたといった感じですが。今は琵琶湖から揚水して、飲料水に使用するだけでなく、田畑に灌漑している地域も増えていますので、昔以上に琵琶湖への依存度は高まっています。

今、世界では、スローフード運動が静かに広がってきています。日本では「地産地消」といって、地域で生産できる食材を使って、地域の手法で伝統料理を作ろうという動きもあります。「安全・安心・健康な食」、「賢沢ではなく、個性ある豊かな食」、「不景気になっても生きのびていける方法」を追い求めていくと、地域の伝統食に行きつきます。それだけに琵琶湖周辺で育まれてきた食文化を、若い世代に引き継いでいかなければならない。そのためにも周りの山や農地、そして琵琶湖をこれ以上痛めつけてはいけなさと痛切に思っています。



堀越教授

梅澤

私にとって琵琶湖は、幼い頃からいくつもの記憶が積み重なってきたちよつとノスタルジックな感情をも呼び起こしてくれる存在ということになりました。じつさい、和歌山に暮らしていた間、縁あって年に何度か北陸地方と往復したのですが、そうした折には湖西線

北村 先ほどの琵琶湖の環境的価値の推計は、飲料資源、水泳場、釣り場という三つの機能に限定したものです。しかし琵琶湖には、その他多くのかけがえのない価値があります。生物多様性という観点から見ても、琵琶湖の固



びわ湖の夕暮れ

で反対側の席に座っていても車窓からなんとなく琵琶湖を見たいと思つたものです。また、琵琶湖の汚染の進行は、梅雨時になると水道水が臭くなるというかたちで生活上も無関心ではおれなかつたのですが、そうしたことを離れても、なじみ深い大切なものが傷つけられてゆくことを残念に感じたものでした。現在のように毎日眺めるようになると、あまりにも日常的になりすぎていつか感慨を覚えるというわけにはゆきませんが、夕焼けで真っ赤に染まつた美しい風景を見るとときなど、単に美しい風景を見ているという以上、琵琶湖のそれを見ているといふ感傷が伴います。そうした琵琶湖の辺りで、今どのよ

うな暮らしが営まれ、どう変貌しようとしているか非常に気になるところです。

有種は大切な存在といえましょう。景観としての琵琶湖も、経済学では存在価値という言葉で表現しますが、重要なものです。それらの一つ一つを大切にしたいものです。

私は、現代社会における非営利組織の役割を研究の一つの対象にしています。滋賀県では、琵琶湖に関連した多くの非営利組織が多面的に活動しています。こうした活動が盛んになることが琵琶湖の環境保全にとって重要であると思います。こうした活動は、琵琶湖をめぐる新たな文化運動という側面を持ちます。また、そうした活動と自治体の施策との連携を強めてゆくことも重要な課題です。学部長職にあつて現在は休止せざるを得ませんが、こうした面での研究に取り組んでゆきたいと思っています。

## 服部

先日、バス釣り愛好家に、「古代湖の貴重な生態系」など説得力がないと言われました。確かに自然の再生が望まれますが、池を掘り、ヨシを植えても生態系にはなりません。その地に古くから生息し、何万年もかけて適応した個々の生物たちが生態系を構成しています。個々の生物の暮らしか関係性をよく観察することで、この自然システムの成り立ちに迫りたいと思います。沖縄でも同じですが、サンゴやジュゴンなど、古くから生息する個々の生物に関心を示す人は少数派です。経済的、社会的な成功を目指す人たちは、生態系への負荷は考慮せず、何か形を残そうと努力するようです。公共事業からイベントまで、やらない方がよいことは無数にあります。ストレスが話題になりますが、健康や癒しの要

素は自然なシステムの中にあるはずですが、せつかに前進するよりも、足を止めてよく考えたいと思います。

## 司会

ありがとうございます。今は同じ琵琶湖を研究対象としながらも、琵琶湖との出会いや関わり方は実にさまざまですね。けれども、先生方に共通することは、単に研究対象だけではない琵琶湖への熱い想いであることがよくわかりました。

琵琶湖畔に位置する大学として琵琶湖との関わりは当然のことのようにも思いますが、もっとお互いの情報交換が必要のように思います。本年度から立ち上がった「環境総合研究センター」を中心に、本学の多様な専門分野を有機的に関連させた研究や教育によつて「私たちの美しい琵琶湖」を守り続けてゆきたいものです。



ブラックバス

地域Ⅱ琵琶湖研究のススメ

近藤 學（経済学部教授）

あれから二十年は経っているでしょうか。私が琵琶湖に関心を持つようになったきっかけは、ある研究会で南湖の幾つかのスポットを回り、琵琶湖総合開発が如何に琵琶湖の生態系を傷つけたかの見方を教えてもらったことがありました。その時の講師は今亡き鈴木紀雄先生でした。カキ氷を食べながらヨシ帯の重要性を熱弁される先生の様子が今も懐かしく思い出されます。その後、自分でも資料を集め、琵琶湖総合開発に関する論文も書いたのですが、それ以上の深入りはしませんでした。鈴木先生からは「裁判と一緒にやらないか」と誘われたのですが、当時の私はそこまで肚を据えて琵琶湖を研究する気にはなれなかったのです。

その後、中曽根・民活路線の中でバブルリゾート開発の嵐が滋賀県にも押し寄せてきました。当時、琵琶湖の周りは百を超える開発プロジェクトが計画され、ゴルフ場、マリーナ、ホテル、空港、高速道路、ダムなどありとあらゆる公共事業のオンパレードだったのです。こうした状況を前にして、私はやはり何かすべきだと感じました。その時、びわこ空港の地元である必佐小学校のPTAから空港問題で講演をしてほしいとの依頼がやってきました。空港問題など自信は無かったけれど、精一杯資料を集め、講演レジメを作成する中で、やはりこの計画は「どこか狂っている」との確信を深めました。

びわこ空港の縁で、地権者集落にもたびたび講演者として招かれるようになり、またリゾート開発に反対する環境NGOの事務局長役も引き受けました。足かけ十年間、ほとんど土日をつぶして滋賀県内を歩き回りました。あるときは市民として、あるときは市民運動家として、あるときは講師として、あるときは大学の教員として、滋賀県ばかりでなく、全国の様々な人々とも知り合いました。当時、知り合った人々の中には今では環境派の首長や議員として活躍されている人もいます。ダム反対意見広告やびわこ空港の是非を問う住民直接請求運動も成功させました。私は、自分の行動が、決して間違っていないこと、琵琶湖の保全のために何がしかの役にたっていることに自信を深めていきました。また、環境NGOとの出会いは、日本ばかりでなく、アメリカ、ドイツ、デンマーク、オーストラリアなど世界のNGO/NPO運動の可能性について私の研究関心を広げてくれました。アメリカのダム政策の転換やドイツにおける循環型社会への転換の動きを自分の目と肌で直接感じることも出来ました。

その後、私は市民運動を続けながら、あるべき地域開発に関心を持つようになりました。この関連で、ある研究会に参画し、滋賀県経済を定期的に観測し、地域経済分析を行うようになりました。そこで農業、商業、中小企業を含む滋賀県経済の発展と琵琶湖の保全をどう両立させるか、というテーマに取り組みました。また、滋賀県や彦根市の審議会委員を引き受けたり、各種団体からの共同研究・受託研究にも取り組みました。また、琵琶湖を縁として、自然科学系の様々な研究者との付き合いも始まりまし



AABE(アジア生物学教育協議会)での基調講演

た。滋賀大学の中で環境研究会を立ち上げたり、また両学部を結び環境フォーラムの結成へと繋がっていききました。また、琵琶湖を縁として、世界の水質汚染問題、世界の開発と環境の両立の問題に関心を広げ、アジアの環境問題やグローバルな環境問題にも関心を広げることができました。昨年十一月には、オーストラリアで開催されたある学会に招待され、基調講演を行いました。(写真参照)

現在は、まちづくりという新たなテーマにも関心を広げています。文化や景観といったものがまちづくりに大きな力を発揮することができ、などと私は私にとって新鮮な驚きでした。地域にはうまい酒、うまい食材、うまい文化が一杯詰まっています。こうした新しい発見があることも地域研究の楽しみの一つです。地域研究は余り正面きって立ち向かおうとするとなかなか足を踏み出しにくいものですが、先達による導きと地域に貢献したいという義侠心があれば、何らかのきっかけで地域との結びつきは生まれてくるものだと思います。多くの方々に地域の現場から学び、地域の魅力に気づいてほしいものだと思います。

## 「見る、触れる、感じる」こと

### から始まる研究と教育

中野 桂（経済学部助教授）

環境教育湖沼実習センターを備える教育学部とは比べるべくもありませんが、経済学部でもその地の利を生かして、琵琶湖に関する研究や教育が行われてきています。

昨年以來、一〜二回生の教養科目となる全学共通教養科目が導入され、そのなかで少なからぬ教員が、切り口こそ異なれ、環境問題を題材として取り上げてきました。私自身、「人間と社会」という授業の中で、琵琶湖の環境問題、特に水上バイクや釣りという琵琶湖にまつわるレジャーの問題を取り上げました。

環境問題ほど「現場」が必要なものはありません。琵琶湖では二〇〇六年四月から、環境対応型でない従来型二サイクル・エンジン・ボートの使用が禁止されます。この規制が行われることになったのは、水上バイクの騒音と排気ガスに悩まされてきた住民グループと一緒にこのなった、誰でも簡単にできる実験から始まりです。五〇〇〇のいわゆる原付バイクから排気ガスを収集して、水に溶かしてその水の汚れを測ってみたのです。その結果、水の汚れを示すCOD（化学的酸素要求量）などが極めて高い値で検出されました。これに驚きその後、海外の文献を調査すると、一九九〇年代半ば頃からレジャー用ボートから湖に排出される排気ガスの影響を指摘する論文が多数見つかり、海外で

は既にそうしたエンジンの使用禁止等の措置が取られていることがわかってきました。一方、水質に関するより専門的な調査も繰り返しました。そして、これらの調査の結果を粘り強く国際会議などで発表し、行政に働きかけることにより、琵琶湖でも遅ればせながら、規制がかかることになったわけです。これは琵琶湖の湖岸で実際に排気ガス臭にふれ、まさに現場の中から生まれてきた一つの成果だったといえるでしょう。

教育の場面でも、「現場」は重要です。例えば「人間と社会」の授業の中では、琵琶湖から回収されたプラスチック・ワーム（プラスチック製疑似餌）を見せました。プラスチック・ワームは、すでに劣化が始まりドロドロに溶けていましたが、それが飲み水である琵琶湖に多量に沈んでいるという事実は、多くの学生にとって衝撃的なものであったようです。実は、自分の飲んでいる水がどこから来ているのか知っている人は多くありません。しかしながら滋賀大学の学生は、寮や下宿の窓から、大学の教室の窓から、そして通学途中の電車の窓から、琵琶湖や琵琶湖に流れ込む川をほとんど毎日目にしています。それは、自分の飲んでいる水を毎日目にしていくと同じことです。東京や大阪などの都会では、なかなかありえない事です。そしてそのことは、きっかけさえあれば、滋賀大生は（敏感に問題を感じることができるということ）を意味しています。

環境問題の多くは、物事の関係性に対する認識が希薄になったところから生じています。自分の着る物、食べる物、そして住む家は、一体どんな素材でできているのか、誰が作っている

のか。そして、それらの物は、一つの役割を終えるところにいつて、何に姿を変えるのか。逆にいうと、こうした関係性が認識できれば、環境問題はほとんど解決したことになるという人さえいます。

経済学では、関係性が見失われて、外部の関係ない問題として取り扱われていた事柄を、自分あるいは企業の内部の問題として捉えなおすことを「内部化」と呼びます。意識としての「内部化」は、それ程難しいことではありません。スーパーに並んでいる滋賀県産のお米は、どんな水、肥料、農薬を使って育てられているのでしょうか。そしてその後、それらの水、肥料、農薬はどこへいくのでしょうか。

琵琶湖は我々のすぐ近くに、スーパーの中にもあって、いろいろと問いかけてくれているようです。



最近のびわ湖調査と実習

遠藤 修一（教育学部教授）

湖況の自動観測

私の研究対象は、びわ湖の湖流、水質、気象などです。二十年ほど前までは調査艇による調査が基本で、移動観測や定点観測などが精力的に実施されました。ところが、湖上調査は気象条件によって制約されることが多く、とくに北湖では午後から吹き出す強い北風によって幾度となく調査を断念しなければなりません。その後の技術革新のおかげで、流況や水質の自動記録が可能となりました。とはいえ、高価な測器を何台も買う予算はなく、測器の設置回収に慣れないために、レジャーボートや漁船によるトラブルが発生し、測器が行方不明になったこともありました。来る日も来る日も測器の捜索のために船を走らせたことが思い出されます。

昨秋に、びわ湖の近江舞子沖にテレメータを設置しました。ブイの設置には多くの方のご協力とご協力をいただきました。このブイは、湖上の気象と水質・流況を二十分ごとに測定し、電子メールによって大学にデータを送信します。つまり、研究室にいながらびわ湖の状況をリアルタイムでモニタリングできるようにになりました。

得られたデータからは、つぎつぎに新しい事実が明らかにされています。



また、超音波を利用したADCPと呼ばれる流速計は、たった一台でいろいろな深さの流れを連続して測定してくれるという優れたものです。さらに、測器の軽量化によって、流速計や水質計の設置・回収が格段と容易になり、データの信頼性も飛躍的に向上しました。

このように調査技術は進展の一途をたどっていますが、広いびわ湖の実態を把握するためには空間的な分布を知ることが必要です。したがって、研究室でパソコンに向うだけでなく、相変わらず調査艇を操船して湖上を走り回っている今日この頃です。なお、テレメータブイによる気象や水質の記録は、左記で公開中です。  
<http://www.sue.shiga-u.ac.jp/andoh/>

調査艇を利用した実習授業と体験学習

私が担当している「地学実験」、「水環境教育実習」、「湖沼学実習」、「理科教材開発（院）」などの授業では調査艇を利用しています。水温・電気伝導度・濁度・pH・透明度、湖泥、プランクトンなどの調査を通してびわ湖の現状を肌で感じることが主なねらいです。定員の関係で一度に乗船できるのは十名程度ですが、少人数の実習であることが一人一人の学習を深めるのに役に立っていると思います。

夏季集中の「湖沼学実習」は、四十年以上の歴史を持つ伝統的な授業であり、毎年五十名程度の学生が参加しています。湖北町の朝日漁協の施設を借用し、五日間の自炊生活の中で、びわ湖調査を行います。本学の二隻の調査艇のほかに、漁船を二隻チャーターして調査を行い、その解析結果を夜のミーティングで報告させています。大人数の合宿形式であるため、学生の中には環境になじめない者もいますが、全員で協力して生活しているうちに、おのずとチームワークが生まれてきます。授業担当者の私や実

習に協力してくれるゼミ生にとつては多大な労力を必要とする実習なのですが、多くの学生が「炎天下の実習はしんどかったけれど、みんな力を合わせてびわ湖の謎に迫っていると」と不思議な感動を覚えた。などという感想を寄せてくれたり、かつてこの実習に参加した卒業生たちが次々に宿舍を慰問してくれたりするのは嬉しい限りです。

環境教育湖沼実習センターの事業の一環として、調査艇を利用した「びわ湖体験学習」を行っています。主な対象は現職教員、一般市民、および児童・生徒ですが、最近では「総合的な学習の時間」として、小・中学校からの依頼が増えています。南湖の濁った水に驚いたり、恐る恐る湖泥に触ったり、顕微鏡で見るプランクトンの不思議な形に歓声を上げたりと、実にさまざまな反応を見せてくれます。極めつけは、採水器で汲んだ北湖の深層水がとんでもなく冷たいことと、少し抵抗を感じながらもその水を直接飲んでみるとなんと美味であることへの驚きです。これこそが「汚いびわ湖」という先入観が吹き飛ばす瞬間なのです。びわ湖は確かに汚れてきましたが、本来の美しさをかろうじて保っています。汚れた湖の姿ばかりを追いかけるとはなく、湖という水環境のすばらしさを体感することによって、環境問題に対する取り組みがより真剣なものになってゆくのではないのでしょうか。





水辺のコモンズと伝統的環境利用

佐野 静代（教育学部附属環境教育  
湖沼実習センター助教）

かつて琵琶湖の周囲には、「内湖」と呼ばれる浅い湖沼が数多く存在していました。これらの内湖は、平均水深が二メートル未満と大変浅かったため、大部分は昭和二十〜三十年代に干拓されてしまいました。しかし近年、内湖のように水域と陸域がなだらかに移行する空間（エコトーン）が、生物の生息地として非常に重要であることがわかってきたため、内湖を見直すとする動きが出ています。

ただ、内湖は生物にとっただけでなく、その周辺に暮らす地域住民にとっても大変大事な空間であったことを見落とすことはできません。内湖とその沿岸一帯には、日々の暮らしに必要な様々な自然的資源が存在しており、これらの空間に対しては共同体的な管理体制が成り立っていました。私は、このような水辺のコモンズと村落の伝統的環境利用に興味を持ち、干拓以前の内湖沿岸村落における暮らしについて、聞き取り調査を中心とした研究を行っています。

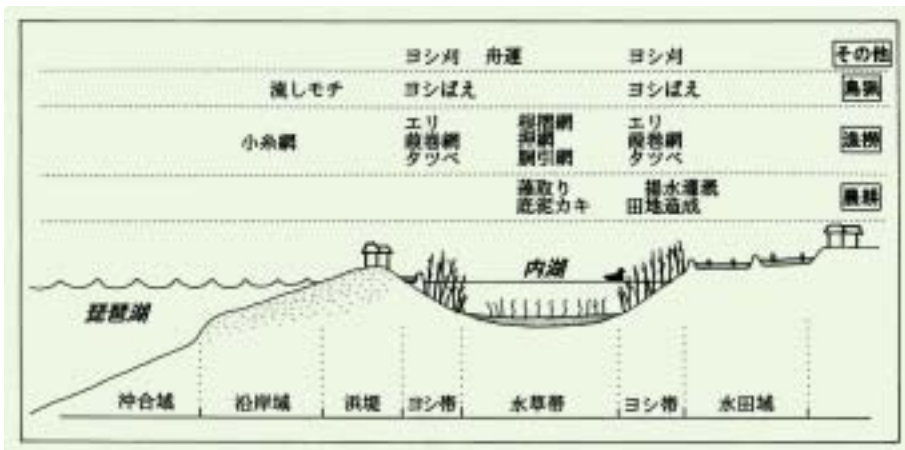
内湖の水域では、フナなどの魚をとるほか、肥料に用いる水草・底泥の採取が行われていました。また冬になりますと、渡ってきたマガモを魚の代わりに捕らえていたそうです。一方、内湖の沿岸では、生い茂ったヨシ・マコモを刈り取って簾・薦を編んだり、屋根葺き材として利用していました。これら内湖一帯の資源をめぐっては、所有権と利用権について村の厳し

い取り決めがあり、資源へのアクセスに関する社会的規制がみられました。例えば水草取りについては、「藻の口開け」といって採取開始時期が厳格に定められていました。

内湖には周囲の集落や水田から排水が流れ込みますが、排水に含まれる栄養分は内湖底に沈殿し、上澄みの水だけが琵琶湖へと流れ出ていきます。内湖はいわば沈殿浄化槽として機能していたわけです。一方、内湖の底にたまった汚泥と水草は、肥料として浚渫されるので、内湖は定期的に掃除されていることとなります。また沿岸のヨシを屋根材用に刈り取ることは、枯れヨシを除去して翌年の芽吹きを活性化させ、ヨシの水質浄化機能を高める効果があります。このように内湖一帯では、地域住民が内湖を多様に利用することが有機的に連動して、内湖を適正に保全するシステムとなっていたことを重視したいと思います。「人が適度に関わること」によって成り立っていた自然という点では、内湖は里山にも近い存在といえます。

なお、聞き取り調査をしてみると、内湖の環境利用が、特に「ヨシ帯」に集中していることが浮かび上がってきます（図）。「ヨシ帯」は多様な価値の重なり合う多義的空間として、住民に重視されていたことがわかります。しかし現在では、「ヨシ帯」は様々な意味を包括したあいまいな空間でいることを許されません。このような水陸の移行ゾーンは、湖岸堤の設置によつて水域もしくは陸域に分断され、どちらか一方の意味に硬直化される現実があります。水辺の空間が本来持っていた豊かで多様な意味は、どんどん貧しいものになっているのが現状のようです。

以上に述べた内湖をめぐる伝統的な環境利用システムは、今後の水辺の保全のあり方にも様々な示唆を与えてくれます。特に現在、残された内湖の保全とともに、干拓地に内湖を復原しようという動きがありますが、そのなかで、人の手が入らない自然のままがよい」といった論調があることが気にかかります。内湖は里山と同じく、人間の暮らしと深く関わりながら保たれてきた自然です。放置するのでなく、地域の生活との適度な関わりをどのように再構築していくのかが、今後の課題になるものと考えます。



大正時代における内湖沿岸の景観構造と生業活動

琵琶湖と私

加藤 竜太（経済学部助教）

私は魚釣りが好きであるから、幼年時から琵琶湖には特別な思い入れがある。私は生粋の江戸っ子であるが、父の仕事の関係で幼い頃には琵琶湖を少なくとも年に一〜二回は釣りをするために訪れていた。もちろん、仕事の父についてくるわけであるから、わざわざ釣りのために来たというのは適切な言い方ではないかもしれない。

私が釣りをしていたのは浜大津からちよつと下ったあたりである。今と比べれば水の色も随分と綺麗だったし、住んでいる魚も全く違っていた。早春には浜大津あたりでも結構な大きさの本モロコが釣れたものだった。もちろん、その頃はぼてじゃこと呼ばれる外道のタナゴがわんさかいて、地元の釣り人などはうんざりしている様子であった。でも私のような東京の子供にとってはタナゴもすばらしい釣りの対象魚であった。

ぐ目の前で次々に鮎を捕らえていく。このわずか二十センチ足らずの浅い湖岸の自然界は、東京育ちの釣り好き少年にとってはあまりにも強烈であった。

このようなイメージをよき時代の私の琵琶湖とすれば、私にとつての最近の琵琶湖は釣師の私が全く予想もしていないことが起こっていた。モロコどころか、ぼてじゃこすらいいではないか。繊細な日本の魚はどこかに行つてしまい、釣れるのは外来魚ばかりである。湖魚専門の魚屋に美味しそうに並んでいるあの湖魚は全く釣れない。今でも魚屋の店頭に並んでいる魚は本当に琵琶湖産なんだろうかと疑いたくなるほどである。

この変容ぶりはすべて人間の仕業である。生態系を無視した結果、琵琶湖が変わってしまった。人間が変えてしまったという意味でこれも環境問題である。一方で、外来魚を釣りに琵琶湖を訪れる人も多く、今や一つの観光産業でもある。環境維持と産業育成のうまいバランスこそが経済学者が答えるべき環境問題である。でも釣師としてあるいは美食家として昔の琵琶湖に思いを馳せれば、炭火で焼かれた薄塩味の本モロコを思い出すのは私だけであろうか。

真夜中の琵琶湖

二摩小百合（経済学部二回生）

琵琶湖は、私にとっていつも当たり前の存在でした。これまで生きてきた二十年間ずっと、変わらずただ静かに、ただ優しくそこにあって、私を見守ってくれている。そんな風に感じられる存在。「琵琶湖と私」というフレーズを聞いて思い浮かんだのはそんな言葉と感情でした。

生まれたときからずっと滋賀県、それも平野部が少なく琵琶湖に近い湖西に暮らしている私は、物心ついたときから毎日と言ってよいほど琵琶湖を見て育ってきました。ですから、琵琶湖の色んな表情、大波に荒れ狂ったり、大雨で洪水になったり等、他の湖では考えられないような事など、も知っています。ですがやはり私の心にあるのは、日本で一番大きな湖等という社会的な面ではなく、前述したように穏やかで優しく、いつも変わらずどこからかひっそりと見守っていてくれる、まるで理想の母親像とも言えるような琵琶湖の姿なのです。

その中でも、特に鮮明に心にある琵琶湖の表情は、何と言つても真夜中の顔です。空も琵琶湖も境が解らないほど真っ暗で肅々とした中、ただ一筋の月光だけが水面を照らして



いる。私は今まで生きてきた中で、これほど美しい情景を他に見たことがありません。そしてその姿に幾度となく励まされてきました。どんなに辛いことがあつても、その姿を見れば何故か不思議と微笑んでしまふ。そして、この景色をまたいつか見ることが出来るのなら、明日も頑張ってみようかという気持ちにさせられるのです。

このように、私にとつて琵琶湖は心の拠り所とも言える存在なのです。もしかしたらこれから先、進む道によっては滋賀を離れる事になるかもしれませんが、どこにいっても私の心には変わらないあの琵琶湖の姿があつて、それを糧にどんな事も乗り越えて生きて行くでしょうし、そして最後には滋賀に、琵琶湖に帰ってくるでしょう。いつもそこにある、私の大切な心の故郷。あなたにも、そんな場所がありますか？

## 変わりゆく琵琶湖の風景

杉江 徹（教育学部教授）

私は高校まで湖北の長浜で生まれ育ち、二十年ほど前から再び琵琶湖に近い膳所に住んでいます。やはり何か惹かれるものがあって、琵琶湖の近くに住まいを求めているのかも知れません。とはいっても、子ども頃最も親しみを感じていたのは伊吹山で、琵琶湖はたまに出会う従兄といったところだったでしょうか。今振り返って琵琶湖のそばで育ったということ強く感じるのは食べ物で、当時、刺身といえば卵をまぶしたフナづくりでした。また私の実家では、祖父母が健在の間は毎年百匹ほどのフナズシをつけていました。時々水を換える必要があったのですが、おもり石をのけるのが子ども頃からの私の仕事で、あのフナズシの何とも言えないにおいが懐かしく思い出されます。最近ではどちらもめったに口にできなくなりました。

湖北野鳥センター前で撮影



場所によって姿を変える琵琶湖の風景を楽しんでいます。一方、私は週末の土曜日を皇子ヶ丘のテニスコートで過ごすことが多いのですが、残念ながらコートから見える琵琶湖の風景がずいぶん変わりました。湖岸に立ち並ぶマンション群を見ると結局はこれが現代文明の姿なのかという思いがします。たまに長浜に帰って、無惨に削り取られた伊吹山の姿を見たときのように。

## 琵琶湖は私の大学生活の場

中井 智子（教育学部四回生）

一回生のときから約四年間、豊かな自然と水に恵まれた滋賀県で過ごしてきました。奈良県出身なので琵琶湖とは縁遠い生活を送ってきたのかというと、実はそうではありません。私の両親がウォータースポーツ好きということで、私も幼い頃から琵琶湖に慣れ親しんできました。だから、私が滋賀大学に進学したこともごく自然なことだったのかもしれない。大学に入ってどのクラブに入ろうか迷っていたとき、一番気になったのがヨット部の試乗会のチラシでした。せっかく滋賀の大学に進学したのだから、琵琶湖を体全体で感じながら新しい友人とクラブ活動を楽しめたらどんなに素晴らしいだろう、と思って即入部しました。実際、湖上の風を受け、水しぶきを浴びながらのヨットの練習はとても新鮮で、興味深いものでした。ほかのスポーツとは異なり、ヨットに乗るときは五感をフルに活動させていなければならず、苦労したことも多々ありました。冬近くには、寒さで身を凍らせていることもありました。それで



も、私を琵琶湖に足を運ばせていたのは、その美しい自然です。クラブをしながら、春には桜、夏は湖水の暖かさ、秋は紅葉、冬は山々に積もる雪など、湖上から年中四季を感じる事ができました。クラブ活動以外にも、研究室による調査の一環として、調査艇で湖上に出ています。調査をするときは、感覚ではなく、科学的に琵琶湖について知ることができました。

このように、私の学生生活は琵琶湖なくては語れないようなものになっています。琵琶湖での経験、琵琶湖について感じたこと、学んだこと、それら全てが私の貴重な財産になっています。そしてこれからも、琵琶湖について深く関わっていきたいと思います。

『ケインズ革命と  
マクロ経済学』

鈴木 康 夫（経済学部助教授）

私の専門分野は、大まかに言えば、ケインジアン体系の貨幣的原理と労働力・資本（・天然資源）の動学を中心としたマクロ経済学および資源経済論を研究基盤として、経済理論一般だけでなく、厚生経済学および経済政策論、景気変動論ないし経済成長論、さらに国際経済学および経済発展論あたりまでをその範囲としている。実際、担当している講義科目の授業も、マクロ経済学概論、マクロ経済学、経済変動論、数学的思考などである。

それゆえ、例えば、日本経済でのリストラや不況の長期化から、日銀の政策拡張、会計方式やストック・オペションの問題、ソニー・シヨック、サハリン開発、りそな銀行への公的支援、韓国的な選択と集中、中国の成長とSARSシヨック、欧米経済の減速から後退化、そしてカメラつき携帯電話普及の世界化、イラク問題や他の内戦など、日常のさまざまな出来事に対して、私の関心も、程度にはらつきはあれ、広範かつ多岐にわたっている。

とりわけ関心が高い問題は、何といつても、日本経済の不況長期化である。近年の数年間を費やして、この冬、ようやく私は『ケインズ革命とマクロ経済学』（昭和堂）という題名の本を仕上げた。この本は、過去の諸研究にもかなり依存しているのですが、明らかにこれまでの研究の所産であるが、この出版の動機を強く刺激したのは、その不況長期化現象であった。この本は、不況に対して何が有効なのかということに関するケインズ的な視座を、この読者に呼び起こさ

せることだろうが、理論書であるがゆえに、現実の不況に対する有効な経済政策を明確に提言するということまでは至っていない。

鮮やかな手品やマジックがまさにそうであるように、感覚はしばしば論理を、時には真実を裏切るものである。これと同じことは、現実の経済事情に注目し、日本経済の不況長期化を日夜検討している研究者達の眼差しにも起こり得るのである。新しい事情の下では、類型化された現象に対する、どんなに慣れ親しんだ感覚であつても再確認が必要であり、科学的な慎重さ



が不可欠なのである。経済学者は、しばしば経験それ自体から離れて、やや極端な「実証」という理論的に類型化された数学的な思考に陥りがちであるが、実践的な真実は経験の側にあり、少なくとも現実の現象に対する考察や政策的提言は、こうした後者の意味の総合的な実証分析に依拠するのだからなければならない。このことが如何に重要であるかを強調したのは、他でもない、J・M・ケインズ、その人であった。私の本も、この精神にそって書かれている。

現在の日本経済の長期化する不況は、専門家だけでなく世の中の関心的であるにもかかわらず、その解決策が有効な経済政策としてはなかなか得られないでいる。一部の専門家は、金融政策のみを重視し、積極的財政政策を無力と主張するが、むしろ、限界にきているのは、超異例な株式などの購入とともに、ゼロ金利下でも量的緩和を続けている金融政策であろう。国内金利の上昇もほぼ見られず、海外への資本流出が続く状況では、政策調整や経済システムのリスクからしても、少なくともマクロ的な金融政策の運用はすでに常識的に正常な限度を超えている。確かに、財政支出は財政赤字を拡大するが、新しい産業分野の発展を効率的に誘導するなどの効果もあるので、この種の方向性を基に積極的でも選択的な財政政策ならば、優遇税制などの効果とともに実際の経済においても有効に働くのではないだろうか。もちろん、政府系金融機関などを駆使して、優良な貸出先を探索及び発見し、かつ、その貸し出しを容易にするミクロ的な金融政策ならば、まだ効果的かもしれない。いずれにせよ、円安誘導だけでは不十分であり、リフレ政策などは、何ら全く根本的な政策ではなく、徒に最悪のスタグフレーションの危険性をはらむものである。



# 分子の性質をコンピュータで予測する

水上 善 博 (教育学部教授)

私は、一つの研究テーマに集中するのが好き(得意)ではないので、いつも三つくらいテーマを平行して走らせています。その結果、研究がまとまるのに時間がかかります。本当は、一つに集中した方が、研究成果を出すのに効率が良いのですが、目移りがする性格なのか、あつちこつち手を出して、発展途上のテーマがいくつもあります。そんな中で、最近、やっと論文にまとまった研究がありますので、ご紹介させていただきます。

ナノテクノロジーという言葉が聞かれたことがありますか? ナノというのは十億分の一という単位で、例えば、地球を十億分の一にすると、だいたい、ビー玉くらいの大ささになります。原子は、 $0.1$  ナノメートルくらいの大ささです。ナノメートルは原子十個分くらいの大ささの世界です。科学と技術の進歩によって、最近では、ナノメートルの世界の原子や分子を見たり、つまんで加工したり、性質を測定したりできるようにになりました。これらの実験技術は、新しい電気的あるいは磁気的性質をもった材料の開発や、医療の分野で役に立つバイオ素材の開発に利用されつつあります。一方で、原子や分子の性質を理論的に研究する分野では、実は、五十年前前から、ナノテクノロジー的手法による研究をおこなってきました。ただし、実験装置は使いません。道具は計算機(コンピュータ)です。原子や分子を一個一個コンピュータで計算して、その性質を予測するという手法です。

原子や分子は、原子核と電子から構成されています。原子核の周りを電子たちが動いています。ミクロな世界の原子や分子の性質を特徴付けているのは、電子たちです。電子の運動は、波動方程式で記述されますが、その方程式をコンピュータによる数値計算で解いて電子が動くときの軌道を求めます。これをより視覚的に表現したものが電子雲です。電子雲は、例えて言うと、分子がまとっている服のようなもので、分子は原子核という骨格の上に電子雲という服を何枚も重ね着しています。その一番外側に着ている服がフロンティア電子による電子雲であり、分子の性質を決定



2,3,7,8-四塩化ダイオキシンのフロンティア電子密度

する上で最も重要な役割を演じます。このことを発見したのが、故福井謙一博士で、いまから五十年前前のことです。福井先生はこの研究で、日本人で初めてノーベル化学賞を受賞されました。このフロンティア電子理論は、今でも広く使われています。

であり、今回ご紹介する研究は、フロンティア電子理論をダイオキシンの毒性予測に利用したというものです。

ダイオキシンは塩素を含む炭化水素化合物で、農薬の副生成物として、あるいは、ごみ焼却過程において偶発的に生成します。少なくとも動物実験では、極めて微量でも高い毒性を発現することがわかっています。ダイオキシンは一個から八個まで塩素がつくことが可能ですが、塩素が何個どの位置に付くかによって毒性の強さが様々に変わることがわかっています。しかし、なぜそうなるのか理由はわかっていま

せんでした。そこで、私は、塩素の付く位置が異なる七十六種類のダイオキシン一つ一つをコンピュータで計算し、そのフロンティア電子密度を求めました。一例として、最も毒性が強い二、三、七、八四塩化ダイオキシンの結果を図に示します。ダイオキシンの骨格の周りを電子雲がおおっていることがわかりますが、この雲が、ダイオキシンが身にまとっている一番外側の服であるフロンティア電子の電子雲です。そして七十六個のダイオキシンは、それぞれ違った形の服(電子雲)をまとっています。そこで、多変量統計解析を用いて、各ダイオキシンにおける電子密度の分布のパターンを分類したところ、毒性の強いダイオキシンはすべて同じパターンに属することがわかりました。

五十年前昔に発見されたフロンティア電子理論を使って、現代の最先端の問題であるダイオキシンの毒性を研究することは、まさに「古きをたずねて新しきを知る」というスタイルの研究であり、宮本学長が本年度の新入生に対して知的自立を勧められた際に、実行するべきこととして述べられた「古典を読み、現場に行つて問題の所在と解決の方向を考える」ことを少しは実践できている研究ではないかと自分では思っています。



## ある日本人のイギリスもうで

藤田 弘之(教育学部教授)

今年の二月はじめから三月中旬まで十五年ぶりにイギリスを訪れる機会を得ました。訪問が決まっていたから、早速あちこちに連絡をとりました。ジョーン・エルソンもその一人でした。彼女は、ロンドン大学キングズ・カレッジで秘書をしていた人で、前回一年半以上にわたって、いろいろな面倒をみてくれました。すぐに、彼女の夫から電話が入りました。長い患いの末、一年前に亡くなったというのです。肌寒い風が吹いていましたが、日の光がまぶしい日曜日にエルソンさんを訪問しました。ご主人と息子のピーターと一緒にパットニーの墓地に行きました。彼女のなきがらは火葬にして、墓地の一角のラベンダー園近くに散骨したそうです。枯葉を取り除き、もってきた菊の花束を置き、手を合わせました。エルソンさん達も黙祷していました。涙を流し、もうだいぶ経つのですが、来るたびに涙が出ますと言いつつ、私が墓参したことを大変感謝してくれました。

ピーターは現在、日本の厚生労働省にあたる省の役人です。年金問題を担当しています。ジョーンからはピーターのことをよく聞いていました。彼は成績がよく、ウィンブルドン近くのグラマースクールに進学を予定していました。しかし、当時の労働党が教育改革をすすめるなか、この学校は迷わずに私立学校に変わりました。そして、ピーターはここに進学しました。労働党を支持するカレッジの先生が、ジョーンをひどく非難したそうです。ところが、こうした先生の子ども達が学校に行く時期になるとさっさと私立学校に入れたそうです。ジョーンが、その時のことをひどく憤慨していたことを思い出します。

ジョーンの住んでいたところはその当時と変わっていません。自宅におもむいたのは初めてでしたが、その暮らしぶりを想像することができました。私立学校に通わせるには相当の負担になったと思います。おそらくは生活を切り詰め、わが子の教育のために支出したのではないかと思います。ピーター一家は父親の近くに住んでいます。その一人娘、エリザベスはすでに中学二年生になつていました。ジョーンがとてかわいがっていたそうです。彼女もまた、ウィンブルドン近くの私立小学校を終え、今は私立中等学校に通っています。エリザベスの話では、学校生活は楽しいが、言われているほど自由なものではなく、制服があり、校則があり、しっかりした規律が維持されています。勉強もかなりきついようで、明日までに相当の宿題を終わらなければと早々に帰っていきました。

十五年前にも感じたことですが、その当時と比べてもいるんなものが一層急激に変わっています。今回もロンドン大学を拠点に、必要な調査をし、関係の研究者と会い、研究テーマについて助言を求めました。その際、動きが急速で、彼ら自身の全体像を必ずしも十分つかみきれないこと、また研究もちょうどジグソーパズルを解くようなものであると言われました。日常生活のうえでの変化も大きいものがありました。

懐かしさもあり、前回住んでいた西プロンプトン駅近くのタムワース通りに行きました。この家の主人はすでに五年前に亡くなっています。通りのすぐ側に、公立のハルフォード小学校がありました。そのたたずまいは、十五年前と同じでした。この学校は、一八七〇年の初等



1878年に設立されたハルフォード小学校

## オーストラリア研究に参加して

二〇〇三年二月二十一日～三月二十日

滋賀大学全学体験学習科目 海外研修(オーストラリア研究)に参加

武田 靖代(教育学部三回生)

私は二月二十一日～三月二十日までの四週間、オーストラリアのメルボルンにあるディーキン大学やケアンズで滋賀大学全学体験学習科目海外研修(オーストラリア研究)に参加しました。

今、この科目を履修して本当に良かったと思つています。私がこの研修に参加した理由は、単に自分の英語力を伸ばしたい、と考えていただけでしたが、英語だけでなくオーストラリアの歴史、文化など幅広く学べるプログラムであったこと、またホームステイをすることで、私の期待以上の体験をすることができました。



授業風景の一コマ

初めの頃は、ちゃんとやっていくのだろうかという不安ばかりでした。そんな私の不安を最初に解消してくれたのは、同じ家にいたもう一人の留学生でした。彼女は中国から、オーストラリアの大学に入る為に勉強しに来ていた高校生でした。彼女と私はすぐに打ち解けることができ、日本のテレビドラマや有名人について、中国と日本の物価の違いについて、また、始まるうとしていた戦争についてなど、たくさんのお話をしました。お互い、母国語以外の言葉で身振り手振りで話し合いました。彼女と話をすることで、私の不安は次第に期待へと変わっていきましました。

到着して三日目、学校が始まりました。最初のうちは学校に行くのも一苦労で、違う電車に乗ってしまったり、降りる駅を間違えたりとトラブルの連続でした。授業は私達日本人だけのクラスだったので、安心して受けられました。毎日の英語の授業では、英語の文法だけでなく、オーストラリアの地理や歴史、アボリジニについてなど学びました。最後の授業では、自分たちの興味のあるテーマでプレゼンテーションをしました。英語だけの文献から情報を

収集し、発表を行ったことは自分の英語力に対する自信にも繋がりました。また、色々な所へ見学にも行きました。美術館や大きなマーケット、ビーチ、日本語と英語のバイリンガル小学校など様々な所に行き、オーストラリアをじかに触れることができました。そして、オーストラリアは多文化社会なのだということを実感しました。もともとイギリスから移民してきた人だけでなく、イタリア系、インド系、アジア系など様々な人種が混在していました。実際、私のホストファミリーは、スリランカから移民してきた人たちでした。また、中国人の留学生もいました。そういった人たちと一つ屋根の下で生活し、ご飯を食べたり、テレビを見たり、旅行に出かけると、これほど刺激に富んだ生活はありません。また、彼らと生活する中で、異文化を持つ人に対する私の考え方は大きく変わりました。今までの私は、外国人の話で理解できないところは、文化が違うから仕方がない、と決め込んでいました。また些細な経験で、「あの国の人はこうだ」と一般化してしまいがちでした。しかしそれでは本当に理解し合うことができないと分かりました。そして、彼らと理解し合う為には、「文化の違い」という概念にとらわれずに、彼らの個性などの観点から理解しよう、と考えるようになりました。そうすることで、彼らとのコミュニケーション

に成功したと思つていました。

彼らとの生活の中で、ショックを受けたこともありましたが、それは、自分がいかに日本について知らな過ぎる、ということでした。日本では「なの？」と質問されることが多かったのですが、その度、うまく説明できない事だらけで、日本人として恥ずかしい思いをしました。しかし、一ヶ月間日本を離れ、日本の良い面も悪い面も客観的に見ることで、今まで知らなかったことが多すぎ、これから勉強していこうと思えました。

この研修で、私は母国語以外で会話できる感動を味わうことができませんでした。英語が完璧というにはほど遠いですが、この様な感動が少しでも味わえた事はこれから英語を学んでいく上での糧になつていくと思えます。またこの研修は自分を見つめ直す良い機会になりました。今まで当たり前と思つていたことが本当はすぐく恵まれていたことや、自分がどれだけ親や友達に頼りすぎていたかがよく分かりました。短い期間でしたが、色々な人に出会い、オーストラリアの文化に触れ、いくらか視野を広げることができたと思います。この経験をこれからの人生に生かすとともに、もっと見識を深めていきたいです。最後に一緒に参加した経済学部、教育学部の九名の友達、そして、本当にお世話になった引率の宮田先生に感謝したいと思います。

## 少林寺拳法部（教育学部）

少林寺拳法は、相手に勝つことよりも自分に克つことに重きを置いている人づくりの道です。

私たち少林寺拳法部は、少林寺拳法の魅力に惹かれて集まり、仲間の魅力に引かれてクラブを楽しんでいる団体です。その結果、現在四回生五人、三回生五人、二回生十一人の大所帯となってきました。和気あいあいとした雰囲気、男女・先輩後輩・同回生、皆仲のよいクラブです。

私たちのクラブでは主に、「昇級・昇段」と「演武」に力を入れて練習しています。前者は、ほぼ全員が初心者で入部し、一年間で黒帯（初段）を取っています。後者は、春・秋に関西学生大会、夏に県大会があり、各種演武を発表し得点を競います。昨年度は、関西学生大会「自由組演武女子初段の部優秀賞」、県大会「自由組演武男子二段の部最優秀賞」、「組演武男子初段の部最優秀賞」、「自由組演武男子二段の部」及び「自由組演武女子二段の部」全国大会出場等好成績を残すことができました。行事のひとつ、夏に香川県の総本山で全国の大学拳法部が集まって一緒に練習する「本部合宿」では、他大学に友達もでき、少林寺拳法の魅力もいつも以上に感じることができました。

少林寺拳法を続けていて得る最も大きな喜び、それは「自分が変わっていきける」ということだと思います。できなかつた技ができるようになった、演武が上達した、どんな小さなことでもいい、その積み重ねが自信や気迫になっていくのだと思います。そして、それは独りではなく

仲間と共に頑張るからこそ苦しさ半分・喜び二倍  
お互いを高めあえるのです。

練習は、毎週月曜・水曜・木曜、隔週日曜に毎回二時間、日曜には監督に来て頂いて技の向上に励んでいます。是非一度武道場に足を運んでみてください。新しい自分に出会えるきっかけになるかもしれません。部員一同、日々精進しつつ、お待ちしております。



小林 可奈恵（教育学部四回生）

## 合気道部（経済学部）

我々合気道部は、「みんなが主役」になれるクラブです。合気道とは、決して相手を攻撃して負かす武道ではなく、相手を「許す」武道であると言われています。合気道の技は、相手に攻撃されたときに相手の力を利用して返すもので、最小限の力で最大限の効果を得ることができると、男女関係なくできる武道です。合気道の理念から試合というものがなく、日々の稽古が何よりも大切なものとなって、頑張った分だけ主役になるチャンスがあります。

合気道部の普段の稽古は、体育館下の柔剣道場で、月・火・水・金曜日の十七時五十分から十九時四十分に行っています。授業の五時限目終了に合わせて約一時間半という短い時間に集中して行っていますが、短時間であるからこそ、一瞬一瞬を大切に全力で取り組んでいます。稽古内容は、技の練習はもちろん、筋力トレーニングなども行い、技術面・体力面とバランスよく鍛錬しています。もちろん、武道であるだけに礼儀も重んじられていて、社会に出ても役立つことを学ぶこともできます。

他のクラブと異なり、試合による成績を残すことでは体育会に貢献できませんが、積極的に体育会行事に参加しアピールすることで、これからも体育会の一員として体育会を盛り上げていきたいと思っています。

藤田 真衣（経済学部四回生）





## 堀尾輝久著 『いま、教育基本法を読む』

歴史・争点・再発見

岩波書店(二〇〇二年)

いま、教育基本法「改正」問題が急浮上しています。中央教育審議会は、「改正」を前提とした「答申」(二〇〇三年三月二〇日)を出しました。この原稿を読まれる頃には、「答申」に基づいた「改正法案」が国会に上程されているかもしれませ

ん。こうした状況の中で、永年、日本国憲法と教育基本法の歴史的意義を強調してきた著者が緊急に出版したのが本書です。もちろん、緊急に出版したからといって、粗雑にかかれていたわけではありません。教育基本法「改正」論者の立論にも反論する形で、あらためて教育基本法の歴史的意義を説く内容になっています。

本書の第一部「教育改革と教育基本法」は、今日の「改正」をめぐる状況を概観した後、教育基本法が誕生した歴史的事情と、戦後史の中でその意義が再発見されてきた経過にふれています。第二部「教育基本法とはどんな法律か」は、教育基本法の逐条的な解説ですが、あくまでも、三つの観点(日本国憲法と一体のも

のであること、教育勅語に代わるものであること、発展的な解釈が可能な形で教育理念が提起されていること)を明確にした上での解説という点に特徴があります。

中央教育審議会「答申」も、現在生じている教育問題の原因が教育基本法にあるとはいえませんでした。教育基本法に書かれている内容を否定することもできませんでした。しかし、「改正」が必要だと結論づけるのです。なぜか。「新しい時代」にふさわしい教育基本法が必要だという論法です。著者は、この「新しい時代」像もとりあげ、たとえばその大競争に打ち克つための人材養成」といったことではないかと指摘しています。

梅田 修(生涯学習教育研究センター教授)



シャーマン・スタイン著 富永 星訳 『数学ができる人はこう考える』 実践=数学的思考法 白揚社

私が経済学部で数学を講義する際にテーマとしていたことが一つだけある。それは定理や公式といった数学的事実ではなく、その発見に至った道筋、いわゆる「数学的思考」を感じとってほしいということだ。数学テクニクなどは講義に出席している大半の学生にとっては単位取得のためだけの一時的な知識であろうが、「数学的思考」すなわち「論理的な考え方」はどんな人のどんな状況にでも活用できると信じている。このような考え方を学ぶことこそが数学を学ぶことの本当の意味ではないだろうか。

ある。読者は自らの手を動かし考えることによって以降の論理展開へ興味を抱き、「常識」の範囲内で問題解決への論理をフォローできるのである。訳者もあとがきに書いていますが、この「手を動かし試行錯誤する」というのは我々プロの数学者もやっていることであり、その様を見せることによって数学が無味乾燥なものではなく、新たな発見の喜びや驚きが見出せるものであることを上手に読者に伝えていく。取り上げている分野も確率統計、トポロジー、グラフ理論、集合論など多岐にわたり、また「背理法」「場合わけ」といった数学的思考の根幹をなす概念が上手に組み込まれている。

大演 巖(経済学部助教授)



# 『大津サテライトプラザ』を開設

## (一) 開設の意義と経緯

本学では、従来から「社会に開かれた大学」をめざし、社会人学生の受け入れ、現職教員の再教育の場の提供をはじめ、一般社会人を対象とした公開講座や各種生涯学習事業等のリカレント教育の実施、教育委員会と連携した各種教育相談の実施等に積極的に取り組み、今後さらに、このような活動を拡充し、推進すべく努力を重ねてきました。

しかし、従来、このような各種事業が、主として大学キャンパスを中心に展開されてきたことから、その参加対象が限定されてきたことは否めず、今後の課題として、こうした社会人の利便性を考慮して、都市中心部の交通至便地にサテライトを置き、地域連携事業の活動拠点として各種事業を実施することが求められていました。

今回、こうした要望に応えるため、大津駅前の平和堂大津店（A・P L A Z A 大津）の五階フロアにて、大津サテライトプラザ」を開設し、幅広く地域連携事業を展開することとしました。

このサテライトは、総面積百六十㎡で、サテライトルーム・ミーティングルーム等五室を有しています。

## (二) 施設の利用案内

滋賀大学大津サテライトプラザ

大津市春日町一 五

平和堂アルプラザ大津五階

TEL 077(524)3692

開館時間 毎日(土曜・日曜も含む)

午前十時～午後六時

利用時間 原則として、開館時間内

特に必要な場合は、午後九時まで使用可能。ただし、午後六時以降九時までの時間帯に使用しようとする場合は、施錠・警備のセット等をする必要がありますので、企画広報室までご相談ください。



## 近江の散歩

### 荒神山

JRびわこ線で彦根から京都方面に向かい南彦根駅を過ぎると、やがて琵琶湖側車窓に小高い山が見えてくる。それが荒神山である。

頂上まで自動車で登ることが出来るが、県立荒神山少年自然の家がウォークラリーのために造ったいくつかの山道が恰好のハイキングコースとなっている。鎖の付いた急坂を登る場所もあり、ちょっとした山登りの気分を感じることもできる。

私がよく行くのは琵琶湖側の麓にある首根沼緑地公園の方から登るコースである。山頂まで上ったり下ったりの道をゆっくり歩いて二時間ぐらいであるが、春は新緑、秋は紅葉を楽しむことができる。山頂からの琵琶湖の眺めはすばらしく、多景島、竹生島、そして比良の山脈を望むことができる。

山頂に荒神山神社の本殿があり、山腹のあちこちには、唐崎神社、千住寺、稲村神社、延寿寺といった寺社も建っている。また古墳や昔の大寺院の跡も確認されており、それらを巡ることによって、荒神山周辺の歴史を偲ぶこともできる。

最近では、みどりの日に朝思い立つて妻と出かけた。森林浴には新緑がまだもの足りないようだったが、山桜の名残が見られた。山道で摘んできたワラビを茹でて合わせ酢をかけ、肴にして酒を飲んだら、何となく満ち足りた気分になった。



荒神山



荒神山神社（奥山寺）

小西 中和（経済学部教授）

# 報道によつた主な記事(二月～五月)

## 二月

- \* 一緒に水ギョーザ作り 中国人留学生と春節祝う 滋賀大留学生参加 (中日2・2)
- \* 立入が丘小学校の児童が留学生と交流 滋賀大学の留学生 (朝日あいいい滋賀2・5)
- \* 国立大2次志願者状況 滋賀大も減少 (京都2・6)
- \* 国立大法人役員数 関係折衝で合意 滋賀大は五人 (京都2・13)
- \* 環境を軸に研究と育成 法人化後の中期目標案 滋賀大運営諮問会議 (京都2・14)他
- \* 経済テーマに来月彦根で記念講演会 滋賀大創立80周年(京都2・14)
- \* 「幻の大仏」一步現実に 鍛冶屋敷遺跡(信楽町) 小笠原好彦教授 (産経2・14)
- \* 今を生きるヴォーリス建築 関西に残る主な建築 滋賀大陵水会館 (朝日2・16)
- \* 心理学・医学でスポーツ支援 大津で16日研究会発足 豊田一成名誉教授提案 (京都2・16)
- \* 「近江商人」の心意気高らかに 滋賀大学 (産経2・19)
- \* 滋賀大写真部展示会 開催案内 (読売2・20)他
- \* 大学生7人が食中毒症状訴え 彦根経済学部学生 (朝日2・21)他
- \* 「コハウジング」学ぼう 住居フォーラム 産業共同研究センター (京都2・23)他
- \* 熊楠賞に本郷次雄滋大名誉教授 (京都2・25)他
- \* 滋賀大経済学部が講演会 「リスク時代の経済運営と企業経営」(毎日2・26)他

- \* 滋賀大が環境総研発足記念しシンポ彦根で来月23日(中日2・27)他
  - \* 滋賀大人事 附属図書館長 小西中和教授 産業共同研究センター長 林廣茂教授 (朝日・読売・京都2・27)
  - \* 2003滋賀大美術展 開催案内(読売2・27)他
  - \* 経済リスク 専門に研究 滋賀大がセンター開設へ (中日2・28)
- ## 三月
- \* 学部の枠越え環境研究 滋賀大4月に総合センター設置/記念シンポジウム (滋賀彦根3・1)
  - \* 実績ある近江商人 リスク管理学へ滋賀大が講演会 (京都3・2)
  - \* 大学生向け大津で面接会 昨年度滋賀大卒業生談 (京都3・2)
  - \* 第14回滋賀大学吹奏楽団定期演奏会「湖(うみ)の音楽会」開催(中日3・7)
  - \* 725人に喜びの春 滋賀大などで合格発表 (朝日3・8)他
  - \* 滋賀大環境総合研究センター 設立記念シンポジウム開催 (読売3・13)
  - \* 健全な危機意識を トヨタ自動車・渡辺捷昭副社長 滋賀大大学院に経済経営リスク専攻開講 (日経3・15)
  - \* 世界水フォーラム 生活スタイル再考へ 酸性雨の負荷大きく川嶋宗継教授談 (朝日3・17)
  - \* 悲惨な事件、絶対不起こさぬ 県内7大学学長 共同アピール発表 宮本憲一学長談 (京都3・18)他
  - \* 環境問題に正面から取り組む 滋賀大学 (産経3・19)
  - \* 滋賀大2次後期 合格者を発表 (京都3・22) 他
  - \* 不登校考える会 彦根で開催 窪島務

- \* 教授による記念講演 「近江同盟3・23」他
  - \* 環びわ湖大学推進会議設立へ 13大学・短大 行政と連携 (京都3・26)
  - \* 日韓の接着剤役 留学生を講師に韓国語講座開く 滋賀大留学生も参加(京都3・25)他
  - \* 厳しい社会果敢に挑戦 958人が卒業 滋賀大 (中日3・27)他
  - \* 文科省機構評価(滋賀大)教養教育…2社会連携…4 (中日3・27)他
- ## 四月
- \* 滋賀大人事 (京都・中日4・1)
  - \* 環境の「教科書」 全新生に配る 滋賀大 (朝日4・2)
  - \* 選挙向けPR看板登場 滋賀大正門前に学生が描く (近江同盟4・3)他
  - \* 1009人新たな一歩 滋賀大の入学式 (読売4・8)他
  - \* JR大津駅前サテライト教室 教育相談や産学連携 滋賀大 (京都4・8)
  - \* 観光フォーラムHPに 滋賀大産学共同研究センター公開 1年間の議事録、映像 (読売4・16)
  - \* 便利な駅前で教育相談 研究者と保護者ら「つなぐ役目を担う」 滋賀大 (毎日4・16)
  - \* 中小企業支援にネット活用提案 共同研究まとめる 県と滋賀大 (京都4・17)
  - \* 「開学祭にぎわう」 琴や尺八、大道芸にライブ 滋賀大経済学部 (京都4・20)
  - \* 「書家人生の集大成」 大津市歴史博物館で個展 池田哲也元教授(毎日4・19)
  - \* 発信!HP 全国の町づくり紹介 産学共同研究センター(朝日4・24)
  - \* 朝日レガッタ 経済学部・教育学部漕艇部出場 (京都4・25)
  - \* 「癒しの園芸活動」開催 公開講座の参加者募集 滋賀大(産経4・26)

- \* 「子育てと親の仲間づくり」 大津でボランティア研修講座 教育実践総合センター(中日4・26)
  - \* 「訃報」宮田正信名誉教授(京都4・27)
  - \* 米寿を記念し絵画展 大津で教え子らと108点 山尾平名誉教授(読売4・27)
  - \* (京)滋大野球「滋大が復帰 初の勝ち点 滋大3対1京教大(京都4・29)
- ## 五月
- \* 大津市のPR大使決まる 秋山真理さん(滋賀大4年)(中日5・1)
  - \* 教員採用卒業生 25人増の104人 滋賀大教育学部 (中日5・3)
  - \* 偉大な食文化フナズシ 民博が季刊「民族学」で特集「琵琶湖と共働」象徴 堀越昌子教授執筆(朝日5・9)
  - \* 公開講座「学校五日制と子どもの教育」受講生募集(京都5・9)
  - \* 県教委 淡海生涯力レツジ生募集 大津・草津では滋賀大教授らが講師を務める(中日5・13)
  - \* 自治体経営を学ぶセミナー 産業共同研究センター(京都5・14)他
  - \* いい先生「発掘」へ出前説明会 京都府教委が初 滋賀大も(京都5・15)
  - \* 商品開発でフォーラム 5日29日 産学共同研究センター(朝日5・19)他
  - \* 意思決定方法構築が課題に 国立大法人化法案が衆院通過 準備進む 強まる学長の権限 教授会どう位置付け(京都5・23)
  - \* 公開講座「日本の流通は本当に非効率なのか」受講生募集 (叙位叙勲)正四位 宮田正信名誉教授(毎日5・24)
  - \* 学生向け説明会開く 放課後学習センター制度 滋賀大と県教委(京都5・27)
  - \* 留学生サポーター制度 今夏発足 県国際協 滋賀大留学生も対象(京都5・31)



編集発行：滋賀大学広報委員会

委員長 住岡 英毅（副学長）  
小栗 誠治（副学長）  
遠藤 修一（教育学部）  
久保 加織（教育学部）  
太田 肇（経済学部）  
加藤 竜太（経済学部）  
片山 敏雄（総務課）  
中村 豊市（学生生活課）  
（ 印は本号のチーフ）

〒522-8522

彦根市馬場一丁目 1 - 1

（ Tel : 0749-27-1172 ）

発行日：平成15年 7月

E-mail : [koho@biwako.shiga-u.ac.jp](mailto:koho@biwako.shiga-u.ac.jp)

ホームページ : <http://www.shiga-u.ac.jp>